

純潔に就ては次の如くに語られる。「性交を少くすること。それは、たゞ健康と子供を拵へることの爲にのみなされるべきである。云々」。このやうな觀念は、その生殖への肯定的態度にも不拘、出生數によき影響を與へなかつた。一般に十八世紀は、併しながら、殊にその後半に於ける避妊方法の普及にも不拘、人口増加の傾向を示した。

十九世紀。一時的なロマンティックの反動にも不拘、啓蒙、理性崇拜、無限進歩と自由への信仰の影響下にたつ。人生觀の世俗化と合理化が進行した。技術化と機械化に従つて、感情生活と直觀が拒否された。宗教的なるものは拒けられ、ニヒリズム、物質主義、出世主義にとつて代られた。Preventivverkehr が世紀の末葉には一般的習慣として都市プロレタリアの廣泛な層に浸透した。出産へのストライキ (Geburstreik, greve du ventre) が、マルクシスト、サンジカリストによつて階級闘争の一手段として叫ばれた。所謂産兒制限は、自明なるもの、責任を自覺した両親への命令と考へられるに至つた。一般的生活様式は、物質的となり平板なるものとなり、それが、性關係につよく影響して、出生減退に大きい影響をもつ近代的精神的ミリューが形成されるに至つたのである。

極めて大雑把に纏めれば、シュテルンベルヒの説くところは以上の如くである。(雪山慶正)

クローゼ稿「和蘭に於ける出生減退」

“Der Geburtenrückgang in den Niederlanden”

von Hermann A. Krose. (Valkenburg, Holland’),

Allgemeines Statistisches Archiv 1940 H. 3.

今世紀以來の出生減退傾向が既に現人口維持の最後の線を一線を割つてゐる北・西・中歐諸國の中にあつて和蘭が唯一の例外國であることは白人文明諸國の出生減退を語る諸家の等しく特記するところであるが、併しこの國にも出生減退の大勢は蔽ひ難く、其の諸要因の究明は所謂再生産率の計算と共に同國統計局の近年特に研鑽を怠らざる所である。本論文は之ら資料の紹介を中心に稍既往に遡り和蘭に於ける出生減退の真相を指摘しようとしたもので、特に新舊兩教派別出生力の興味ある比較に及んでゐる。

いま出生率について和蘭人口趨勢の概觀を試みるに、前世紀末までの間は多少の起伏こそあれ出生減退をいふ餘地はなく、之を獨逸の其れと比較してみると次の如くで不思議なほど其の歩調を合せてゐる。

	和 蘭	獨 逸
一八四一—一五〇年平均	三三・一	三六・一
一八七六—一八〇年平均	三六・四 (同國の最高率)	三九・三 (同國の最高率)
一八九一—一九〇〇年平均	三三・五	三六・一

然るに今世紀以來兩國とも漸減傾向を見せて、

	和 蘭	獨 逸
一九〇一—一〇年平均	三〇・五	三三・三

となつて居り、和蘭は一九〇八年には遂に三〇%の數値を割るに到つた。たゞ獨逸は之以後その出生率に激落歩調を開始したのに對して和蘭は三〇%を割つたまゝで再び落ちつきを見せてゐた。

一九一〇年	二八・六
一九二〇年	二八・六

従つて今世紀以降北・西・中歐諸國で年々その出生總數の減少せる中にあつて和蘭のみは出生總數に寧ろ増加の跡を示してをり、一九〇五—一九〇九年

平均出生數を一〇〇として再び獨和兩國を比較してみると次の如くで

	和 蘭	獨 逸
一九〇五—一九〇九年平均	一〇〇	一〇〇
一九二〇—一九二四	一〇九	一〇〇
一九三二年	一〇五	六〇

北・西・中歐諸國中に於ける和蘭の例外的地位を招來した事情も納得される。

が人口の著増を見たこの期間の和蘭にとつてこの出生總數の増加よりも更に注目すべき事實は寧ろ其の異常な死亡率の低下であり、一八四六—一五〇年平均の死亡率二八・五(獨逸は二七・五)は一九三七年には僅かに八・八(獨逸は一・八)と三分の一以下に低下され世界最低の記録を示してゐることである。乳兒死亡率も(一歳未満、出生百に付)三・八を以て歐洲諸國中の最低位にあり、自然増加は(人口千に付)一一・九の數値を示してゐる。それ故に平均壽命の延長も著しく、一八七〇—一九〇九年平均(男)三八・四歳から一九二一—三〇年平均の(男)六一・九歳へと驚くべき變化の跡が見られる。この和蘭特有の事情が同國の年齢構成の激變を齎したのは當然で、妊孕力を喪へる女子人口の著増は前世紀末に較べて特に顯著である。本論和蘭に於ける出産減退の検討も實はこゝから初まるわけで、論者が所謂出生粗率の累年比較を以て満足せず、時代の推移に伴ふ妊孕年齢有配偶女子の特殊出生率の變遷に其の真相を究めようとする所以である。

二

そこで論者は五十歳以下の有配偶女子千人に付その出生數を求めて次の如き表を掲げてゐるが、

クローゼ稿「和蘭に於ける出産減退」

年次 一八五〇—一八六〇—一八七〇—一八八〇—一八九〇—一九〇〇—一九一〇—一九二〇—一九三〇—一九三二—一九三五

(備考) 滿四十九歳は和蘭官廳統計が妊孕力の限度として採用するものである。尚、右表中に私生兒は含まれてゐないが、和蘭に於ける私生兒出生數は極めて少なく且つ年々減少の傾向を辿つてゐて、全出生兒に對し一九三五年に一・五四%を算ふるに過ぎない。

論者によれば一八七〇—一九〇九年の一時的上昇は經濟的興隆による婚姻増加の爲めで、從つて之に續く八〇—八九年の對前期低下も實際の出産減退と解すべきではない。併し九〇—一九九年の數字は既に事實上の出産減退を意味することになり、以後今世紀に入つてよりいよゝゝ其の落勢を強くしてゐることになる。

併し右の出産力減退の事實を其の數字面の示す以上に更に深刻視せざるを得ない所以は妊孕年齢女子の年齢構成で出産力の比較的の高い三十五歳以下の比率が既往に較べて増加してゐることであり(一八四九年に四三%、一九三〇年に四八%)、又これを平均結婚年齢に見ても現在は既往に較べ多子出産に便であることである(平均結婚年齢一八八〇—一八九九年に男三〇・二〇、女二七・四六。一九三五年には男二九・〇七、女二六・三四歳)。之らの有利なる諸事情にも拘らず猶ほ妊孕年齢有配偶女子の出生率の低下を見る理由を本論々者は現代人に通有な産兒制限思想に歸し、近隣諸國に施行されてゐる所謂「純再生産率」の算出が和蘭統計局によつても異常な關心を以て採用するに到つた所以に言及してゐる。

繼いで論者はこの計算結果の紹介に及んでゐるが、勿論和蘭の純再生産率はなほ一を割るには到つてゐない。とはいへ危険な極限的狀態を彷徨してゐることは否定し難い。最近和蘭の出生率、出生數及び純再生産率は次の如くで

出生率	出生數	純再生産率
一九三一—三三二年 二二・一 (一九三〇年)		一・二五
一九三五年	二〇・二一	一・一〇二
一九三六年	二〇・一六	一・〇九七
一九三七年	一九・八	殆んど一に近し
一九三八年(速報)	二〇・六	一七八、四一三

純再生産率は一九三七年に殆んど一に近づいたが、併し三八年には出生率は三四年度の水準に回復する喜ぶべき反撥を見せるに到つた。この回復が果してナチス獨逸に見る様な恒常的傾向を辿り得るものであるか如何かが問題で、同國統計局が出産力に對する父母年齢別、宗派別の影響等種々の検討を施行しつゝある所以も亦こゝにあるが、本論々者も尙この點については確定的斷定を差し控へてゐる。

三

最後に新舊兩教派別の出産力の比較として論者の紹介する興味ある數字を擧げてみると、和蘭は新教の壓力的に優勢な國(舊教徒は三分の一強に過ぎぬ)と考へられてゐるにも拘らず一九三五年新教徒の母より生まれたる者は同年總出生數の半分に足らず、總數に於て舊教徒の母よりの出生兒數より尠い。更に妊孕年齢有配偶女子の出生率(該當女子千人に付出生兒數)を宗派別に見ると次の如くで(括弧内は指數)

年次	新教徒	舊教徒	イスラエル教徒	無宗派
一九〇九—一〇	二二・九三(100)	二六・九(113)	一五・七(70)	三三・四(148)
一九三五	二三・三(100)	二〇・八(89)	一五・二(65)	一四・五(63)

一様に低下傾向にあるとはいへ舊教徒の比較的優位は年と共に著し。(無宗派の指數増は新教徒よりの轉入者に因るもので本質的なものではな

い。)又特に一九三五年に試みられた父母の宗派的異同による集計によると父母共に同宗派なる場合の婚姻一に對する出生兒數は次の如くになつてゐるが、

新教	舊教	イスラエル教	無宗派	宗派上の雜婚
二・五	三・九五	一・四八	二・六〇	一・三六

併し財政状態、知識程度、社會的地位等種々の事情の相異があるので右の數字を單に宗教道德のみによつて説明するのは無理であり、妊孕年齢有配偶女子の年齢構成や定住地の都鄙別影響等確かに舊教徒の方に僅かだが有利な事情が認められる。

そこで特に職業、社會的地位、教育程度等に本質的な相異を見せない農業人口に就いて之を見ると次の如くで舊教の優勢はやはり壓力的といつてよい。(一九三五年、妊孕年齢有配偶女子千人に付)

新教	舊教
一四三・一三	二六四・七六

敘上の如き集計結果は本論々者をして宗教を『夫婦の妊孕率の上に尠なからざる影響を有つ一要因』なりとする同國中央統計局の意見を肯定せしめてゐる。(本多龍雄)

正 誤

第一卷 第五號	正	誤
二九頁 下段	第二三行	二倍以上
三三頁 下段	第一行	二十歳乃至五十歳
		二十歳乃至三十歳